

みんな青い服を着て掲示板の前に立ってささやき合う人波の後姿が写された1枚の写真を建築家鈴木恂氏にみせてもらった。写真に記された1970年代半ばの中国は大字報がまだ氾濫していた文化大革命の末期だった。そこにあふれている緊迫した空気が示すように、当時の大陸の気分はまだやや抑圧的であった。それでも吉阪隆正が期待を寄せていた革命後の素晴らしい新世界でもあった。

かんそうなめくじを自称する吉阪は、1974年から亡くなるまでの晩年の生涯において、あの長い歴史を持つ新世界の風土を再び跋涉した。青銅器に刻む饗養紋、古都西安にそびえ立つ大雁塔、韶山にある毛沢東の故居、天安門の前の長安大街に疾走する自転車の大群といった訪中の見聞が吉阪の日記帳にスケッチによって記されている。戦争によって禁断の大陸にされた中国への道は、このころからやっと切り開かれてきた。

1972年日中国交回復の翌年の末、本格的に両国の建築に関する学術・技術・芸術交流を図る組織である「日中建築技術交流会」（以下、日中交流会）の設立総会が日本工業倶楽部で開催された。そのころから、両国の建築学会を中心に、同交流会を通じて両国の建築界での友好交流の幕が開けられた。実は中国建築界と交流をはかることは、同年初頭に日本建築学会の第33代会長に新しく着任した吉阪の抱負の一つであった。中国大使館との斡旋や、中国建築学会との交渉といった公的な事務において、吉阪会長は日中交流会の発足に大きな役割を果たし、大黒柱的存在であった。とりわけ晩年の吉阪が同交流会の会長として務めたときの中国は文化大革命末期にあたって、訪中が相当難しい状況の中、同交流会は極めて重要な窓口として、日本社会が中国建築の実

情を知ること大きく貢献した。しかしながら、中国国内の市場経済の推進につれて、両国の建築交流が広範囲かつ自由化され、会員数の減少と財政状態の関係で本交流会が2003年末に解散した。1973年から2003年に渡って、やや短い30年間の歴史だったが、この組織は日中建築友好の確立という歴史使命を達成したため、歴史の舞台から立ち去ったのではないだろうか。まさに功成り名遂げて身退くということである。それ以降、日本と中国の両国における建築交流関係が深く緊密に築かれるようになってきた。同時に吉阪自身の宿願も遺憾なくとげられた。

この展覧会が開催している現在、2022年は丁度日中国交正常化50周年を迎える節目であり、50年前に日中両国の建築交流事業の促進に心血を注いで奔走しつつあった吉阪は、建築界にとどまらず、近代日中交流史においても極めて重要な人物として銘記すべきである。また一方、吉阪が1941年に北支蒙疆地域の住居調査に出かけたときは中国大陆との最初の接触だったが、その後、その地と断絶させられ、大陸との再会は日中交流会が発足したこの1970年代のころであった。この30年前後に国際社会はいかに変わったにもかかわらず、吉阪が再び中国へ向かったことから、お互いの生活を理解することを重要視していた吉阪の一貫したこの思想を垣間みることができる。それは国際人としての吉阪の根底にある平和に暮らせる人類世界への理想につながっていることにほかならない。